



日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <https://www.jnpc.or.jp/>



全制覇

全米オープンに優勝、「生涯ゴールデンスラム」を史上最年少で達成した小田凱人選手
= 9月6日、米ニューヨーク 撮影：横山 純太郎（共同通信社写真部）

1年ぶりの自民総裁選討論会 トラブルはなく、達成感は――

5人の候補者は10階ホールを後にし、司会と質問を担当した企画委員が9階の控室に降りてきた。9月24日の自民党総裁選立候補者討論会は、ほぼ予定通りに進み、特段のトラブルもなく終わった。事務局としてはほっと胸をなでおろすところだ。ただ、企画委員たちの表情から達成感を感じとることはできなかった。記者会見は、登壇者と記者がともにほくろより優れているかをアピールする場であるはずだ。その言に大げさ、矛盾はないかと記者は質問を重ねる。でも、候補者に「千万人といえどもわれゆかん」の熱がないと、そこに緊迫した、充実したやりとりが生まれる余地はなくなってしまう。

翌日の新聞の「独自色なき討論会」の大きな見出しを見て「一面のアタマにこれか？」と思ったものの、否定しがたい。戦名乗りが聴こえはしたが、響いてくるものはなかったといえまいだろうか。1年前に同じ会場であった討論会は候補者が9人もいて、まさに時間との闘いだった。それでももつと上がった声が聞こえていた。ただ、その場で発した言葉がのちにむなしくほごにされ、それとともに自民党の勢いも沈んでいった。今回の討論会が、いふところ影を落としていた今回だった。

小泉進次郎さんは前回、「決着」と揮毫した。いまにして思えば、心意気を感じる。今回は「異志統一」。異なる志を統一する難しさを語っているように見えてしまう。

（専務理事 江木慎吾）

自民党総裁選立候補者討論会

*代表質問担当委員の報告

ジレンマ越えられず？

橋本 五郎（読売新聞社
特別編集委員）

国政選挙や総裁・代表選の代表質問を担当して四半世紀余り。ジレンマを乗り越えられないまま今日に至っている。さまざまなテーマをまんべんなく取り上げる網羅型か、それともテーマを絞って重点的に追及するか。派手さを追うのではなく地道な政策論議をしてもらうか、それとも留飲が下がるような質問も含めて面白い展開を考えるか。

毎回質問者の間で議論するが、結局は折衷型になってきた。それでは今回はどうだったか。ジレンマは依然解消されず、折衷型はどうしても避けられないのである。問題はその中で「なぜ」に答えるものになったのか。候補者それぞれの人物、政策が明らかになったかである。

5人に共通していたのは「安全運転」だった。自民党は参院でも過半数を割ったのだから、頭を低くして反省の姿勢を示さなければならぬし、運転は安全でなければならぬのはもちろんだ。しかし、誰か一人でも敢然と打って出る「闘う」姿を見せてほしかったと思うのである。特に小泉進次郎氏は所信の表明ど

ころか、候補者同士の討論でもペーパー（想定問答用紙）を見ている。つい「失言を恐れているためだろうが、まだ44歳の若さでそんなに慎重でどうするんですか」と挑発した。それに対して「書いたものではあつ

内向き姿勢を崩せず

佐藤 千矢子（毎日新聞社
専門編集委員）

総裁選の討論会で代表質問を担当したのは3回目になる。「解党的出直し」の言葉とは裏腹に、これほど候補者が独自色を消そうとした論戦は初めてのように感じた。

出馬表明の記者会見などから、ある程度、予想できたことなので、事前の作戦会議では、いかに候補者の「守り」を崩すかを話し合った。心がけたのはテーマを絞り、通り一遍の質疑にならないよう、更問いを重ねて議論を深めることだった。

準備して臨んだが、候補者の内向き姿勢を崩すことは難しく、面白みに欠ける討論になったと思う。終了後、先輩記者、政治家から感想をもらった。

でも自分の言葉だ」と釈明した。こんな具合だから、終了後に「盛り上がり」に欠けた「国家観も聞きたかった」などの指摘があったが、討論会の狙いである人柄を浮かび上がらせることはできたかと思う。小泉氏のペーパー読みも、何を言われようが構わない、失言リスクを避けて総裁の座を手に入れるのが第一という覚悟の結果だとすれば、それも一つの境地かもしれないと思った。

自民党のベテラン議員は「候補者が政策を語ろうとしない。語っているのは政策ではなく、単なるスローガンだ」と怒っていた。

ベテラン記者からは「昨年の討論会で小泉進次郎候補が失速したような『面白い論戦』は異例だ。今回は通常パターンに戻ったということ。必要なことはおおむね聞いていたのではないか」となぐさめられた。別の記者は「いっそのこと、当たり前の政策テーマを聞くのをやめて、全く違う話題で議論してもよかったのでは」と話していた。論戦のあり方に正解はなく、何度やっても毎回、課題が浮かび上がる思いがする。

実施要項メモ

▼日時…9月24日（水）13:00～15:00
10階ホール▼登壇者…小林鷹之、茂木敏充、林芳正、高市早苗、小泉進次郎の各候補（届け出順）▼総合司会…小栗泉企画委員、第1部司会…山下毅企画委員、代表質問…橋本五郎、伊藤宏、佐藤千矢子、奥村茂三郎の各企画委員▼進行…第1部（約45分）各候補者が「一番訴えたいこと」をボードを用いながら主張（持ち時間1分）。その後、立候補者同士の討論。相手を指名して質問、相手が回答（各1分）、質問者がさらにコメントする（30秒）の形式で3巡行つた。【第2部（約80分）代表質問団との質疑応答▼参加者数…会場（スチル・ムービー含む）177人、オンライン111人▼自民党総裁選の立候補者討論会は14回目▼NHKが生中継。民放の中継代表はTBS。ムービーはテレビニュース映画協会代表（日本テレビ、テレビ朝日）、東京写真記者協会代表（時事通信社）、在日外国報道協会代表（AFP通信社）など8社13台▼スチルは東京写真記者協会（各社1人）、在日外国報道協会代表（新華社通信）▼会員向けにライブ配信を行った。日本記者クラブ写真撮影は津野義和氏（ガンマ通信）。

候補者減、時間との闘いも減

1年前に実施した総裁選立候補者討論会を思い起こすことの多い今回の討論会だった。1年前は9人が立候補した。今回は1年の間に自民党の国会議員の数が大きく減ったので、獲得しなければならぬ推薦人の数を考えると、そもそも9人もの候補が立つことはあり得なかった。

結果的には、前回にも名乗りを上げた5人が壇上に並んだ。

候補者同士が討論する第1部で昨年は相手を指名して各候補が2問ずつ質問した。今回はそれが3問ずつに増えた。候補者同士の討論は、他の候補に比べて自分の優位を直接に示せる機会と思われ、それぞれの候補にはそれなりの戦略があったはずだ。質問を投げた相手の答えを受け、さらに自分が一言を加えることができる。

企画委員の事前の打ち合わせで



撮影に応じる小林鷹之、茂木敏充、林芳正、高市早苗、小泉進次郎の各候補（左から）



代表質問を担当した奥村茂三郎、佐藤千矢子、橋本五郎、伊藤宏の各企画委員（写真下左から）



は、質問が少数の候補に集中するのではないかとの懸念の声が出た。結果的に全15問のうち、林さんと小泉さんに4問ずつ、小林さんと高市さんに3問ずつ、茂木さんには1問が投げられた。すべての候補が自分の問う3問を、3候補に振り分けた。

バランス。これが討論会を通しての印象にほかならなかった。質問にも、回答を受けての一言にも、相手の弱点に攻め込み自分の優位を強く印象づけようという意気込みは感じられなかった。解党的出直しを言うわりに、「解党的」な迫力も感じることができなかった。

第2部の記者クラブ代表質問団とのやりとりについては、詳しくは質問を担当した企画委員の報告に譲る。今回も厳しく、具体的に問う方針のもと、担当の委員が質問を持ち寄り、テーマ、問う相手、順番、質問の表現まで事前に詰めた。当日は会場からカードで質問を寄せてもらい、代表質問に取り込んだ。

候補者数が減ったことで、「時間との闘い」は軽減された。全体では予定時間を少しオーバーしたものの、質問数を大幅に少なくすることなく、聞かなくてはと用意した質問は、ほぼ聞くことができた。

（江木）

目次

▼ 自民党総裁選立候補者討論会	2・3
▼ 会見リポート	4
興梠一郎 神田外語大学教授／小和田恆 元国際司法裁判所長 元外務事務次官	
▼ ワーキングプレス	5・7
抗日戦争勝利80年軍事パレード	
神戸・女性刺殺事件	ANN 李志善
群馬県伊勢崎市で41・8度	神戸新聞社 山岸洋介
上毛新聞社 関口健太郎	
▼ 被災・防災・減災 最前線	8
悪石島の群発地震	
南日本新聞社 平川順一朗	
▼ 被爆80年報道 長崎新聞「つなぐ」	9
長崎新聞社 田中祐作	
▼ 2025年記者研修会	10・12
▼ 記者ゼミ	12
▼ リレーエッセー	13
「金嬉老事件」の金嬉老さん	
共同通信社 佐藤大介	
▼ 書いた話書かなかった話	14・15
拉致事件を巡り論争	
北朝鮮幹部の消息は書けず	
塚本壮一	
▼ MYBOOKマイPR	16
▼ 写真回廊	18

「中国で何が起きているのか」②
興梠 一郎
こうき いちろう
神田外語大学教授
9月11日

出席：会場35人、オンライン57人／司会：高橋哲史委員

外交と経済「股裂き状態」



中国の政治・経済の現場で何が起きているのかを正確に見極めるのは難しい。政策決定

過程はブラックボックスであり、公式統計がどこまで経済の実態を示しているのかも判然としない。

ただし、手がかりはある。現代中国論が専門の興梠氏が勧めるのは、中国共産党機関紙・人民日報の「逆読み」だ。

例えば、7月31日付人民日報。中国共産党政治局会議で強調された「法と規則に基づき企業の無秩序な競争を管理する」の一文からは、電気自動車（EV）などの値下げ合戦の激化によるデフレを懸念している様子が読み取れる。「衝撃が大きい貿易会社を援助し、融資の支援を強化する」の一文からは、米中対立で企業が打撃を受けていること、銀行があま

り融資をしていないことがわかる。米国が「プロパガンダ機関」と認定した人民日報も、記事中の党中央の指示を丹念に読み解けば、何が問題になっているか把握することができるといえる。

掲載写真も重要な情報だ。北京で開かれた軍事パレードを報じた9月4日付の人民日報は、習近平国家主席を大きく扱い、権力基盤に揺らぎがないことを示しつつ、習氏とロシアのプーチン大統領、北朝鮮の金正恩朝鮮労働党総書記が並んで歩く写真掲載した。

「同志」を左右に従え、政治的には心地よかったのかもしれない。だが、経済的にみるとどうか。中国の最大の貿易相手国は米国であり、ロシアと北朝鮮ではない。興梠氏は中国の政治・外交と経済は「股裂き状態にある」と評した。

景気を良くしたいのに一番のビジネス相手とけんかする。投資を呼び込みたいのにウクライナを侵略する国と、派兵して侵略を支援する国と親密さをアピールする。企業や投資家の警戒感や嫌悪感を高め、経済の足を引っ張ることは間違いない。これは中国国民にとって良いことなのか。興梠氏が発した問いは重い。

読売新聞社編集委員 小川 直樹

「戦後80年を問う」⑬
小和田 恆
おわだ ひさし
元国際司法裁判所長、元外務事務次官
9月12日

出席：会場39人、オンライン53人／司会：杉田弘毅委員

国家から人間中心の世界へ

優れたレクチャーは秀逸な音楽や演劇と似る。聴く者を魅惑し、魂を激しく揺さぶり、余韻を残す。質疑応答を含め2時間近くに及んだ会見を聴き、そんな思いを強くした。

中学校1年生の時に終戦を迎え、「戦後80年を振り返ることは自分の人生を振り返ることに等しい」。その言葉に続き、メディアに携わる者に投げかけられたのは、戦後80年報道への率直な違和感である。

「国民がひどい目に遭ったことを記憶に残すことは大事です。ただ、それだけ見ていてそれでいいのか」「ビクティマイザー（加害者）としての日本をどう評価するのか」



原点には外務省入省後、10年近く日韓の国交正常化交渉に携わった自身の経験がある。今で

も「韓国との関係は本当に解決したとは言えない」と指摘する。

本会見の白眉は、国益を守ることと使命とする外交官としての経験を踏まえつつ、国家を超えた規範・秩序を追求する国際法学者としての理想が熱く語られた点にある。

グローバル化した世界を「グローブ（地球）の上に住む人間が『運命共同体』と自覚せざるを得ない状況」と定義する。気候変動しかり、パンデミックしかり、核リスクしかり。

だが、自国第一を掲げる国家が立ちあがる。ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ攻撃、トランプ米政権の高関税政策――。眼前に広がるのは大国・強国が国際法とルールを踏みこむ世界の現状だ。

「主権平等」と「内政不干渉」の原則に基づくウェストファリア体制を超越し、主権国家に一定のたがをはめる「他律的な秩序」を構築する必要性を説く口調が熱を帯びた。

これまでの国家中心の世界を、人間中心の世界へと変革する。そのために何ができるのか。戦後80年にあたり、日本という国家だけでなく、地球市民としての私たち一人一人に突きつけられている問いである。

日本記者クラブ理事 毎日新聞社主筆

福島 良典

抗日戦争勝利80年軍事パレード

李 志善（ANN中国総局）

「不測」を回避 警戒態勢

習氏演説中は撮影不許可

軍事パレードの取材が許可されたとの連絡が中国外務省からあったのは前日の夜だった。ただ、テレビ局であるにもかかわらずカメラマンは同行できず許された撮影機材はスマホ2台と民生機のビデオカメラ1台のみ。中継機器の持ち込みも厳しく制限された。急ぎ準備をして集合場所となるメディアセンター近くのホテルにチェックインし、2時間の仮眠をとった。

グローバルサウス記者多数

午前2時すぎ、空はまだ暗い。天安門から約7^{キロ}離れたメディアセンターには、すでに機材の検査と招待状の受け取りに大行列ができていた。目立ったのは中国が進める巨大経済圏構想「一带一路」に参加する中央アジア5カ国やアフリカ、中南米など「グローバルサウス」の記者たちだった。

私たち日本メディアはほぼ1社1人ずつ、「申し込みは先着順」との



胡同の警戒にあたる武装警察(左)と公安警察(右)(9月3日/筆者撮影/ANN提供)

説明で取材を許可されなかった社もある。10年前、日本のテレビ局は1カメラ1記者、現場からの中継も許さなかった。いま中国がどこを向いているのか、誰に見せて誰に見せないのかが各国メディアの選び方から透けて見えた。

その後、厳重な荷物検査と顔認証のセキュリティチェックを受けた後、大型バスに乗り込み会場へと出発した。ようやく前門のあたりに到着したのは朝ぼらけのころ、記念撮影をしながら歩く市民らと天安門を

目指した。途中、目に入ったのは広場につながるすべての胡同(北京特有の狭い路地)が車両と柵で封鎖され公安警察と武装警察がにらみを利かせていたことだ。

2回目のセキュリティチェックを終え天安門向かいの指定席に着いたのは午前6時前だった。するとメディアの担当者から「8時45分から9時20分までの間は撮影をやめ静かにするように」と指示があった。前回の例に照らすと、ちょうど習近平国家主席が壇上に上がって演説を終えるまでだ。招待されて来たのに取材するなどは初めての経験で不測の事態を起こさなという厳しい姿勢を感じた。

並び立つ3首脳にざわめき

ホストの習近平国家主席を中央にロシアのプーチン大統領と北朝鮮の金正恩総書記の姿が会場の巨大モニターに映し出されると異様なざわめきが広がった。壇上には26人の各国の首脳級と中国の指導者たちが並んだが、身振り手振りを交えて話す中口朝3首脳の親密さは際立っていた。戦後80年の節目に欧米に対抗する新たな国際秩序の到来をアピールするかのようだった。

冒頭の演説で習主席は「人類は再

び平和か戦争かの選択に直面している。中国人民は、各国人民と手を取り合って人類運命共同体の構築に努める」と述べた。ただ、戦争の当事者であるプーチン大統領とその戦地に派兵して多くの死者を出した金総書記が脇を固める中で、果たしてどれだけの人がこの言葉を素直に聞けただろうか。

天安門に巨大な肖像画が掲げられている毛沢東氏はかつて「政権は銃口から生まれる」との言葉を残した。今回の軍事パレードでは最新鋭の兵器に加えて「共産党がなければ新中国もない」との歌も流された。一党支配の正統性と軍事力を誇示する姿勢はいまも変わらない。

翌朝、空に軍用車両や航空機から出たとみられる濃いスモッグが残る中、中国メディアの見出しは礼賛の一色となった。他方、軍事パレードについてSNSに批判的なコメントを投稿したなどとして47歳の湖北省の男性が拘束されたとのニュースも伝えられた。理由は、「国家および民族の感情を冒瀆し、愛国心を傷つけて深刻な社会的悪影響をもたらしたため」だった。

リ・チソン▼2012年テレビ朝日入社
外報部「報道ステーション」社会部
「グッドモーニング」を経て 21年から
現職

神戸・女性刺殺事件

山岸 洋介(神戸新聞社報道部)

類似の前科報じる葛藤 再発防止つながる記事を

24歳の女性が自宅マンションのエレベーターで、見知らぬ男にいきなり刺殺される―。理不尽すぎる事件が8月20日夜、神戸で起きた。

男は女性の後ろに続いてオートロックをすり抜ける「共連れ」という手口で侵入し、一緒にエレベーターに乗り込んでいた。

2日後に東京・奥多摩で逮捕された35歳の容疑者は女性と接点がなく、調べに「好みのタイプだったのの後をつけた」と供述したとされる。

事件2日前から女性を執ように尾行する男の防犯カメラ映像、オートロックの抱えるリスク、ストーリーカーの再犯問題。報道に対する反響は大きかったが、取材や伝え方を巡って考えさせられる場面もあった。

最も悩んだのは前科報道だ。

容疑者は、別の女性2人に対するストーリーカー行為で5年前に罰金の略式命令、3年前には執行猶予付きの有罪判決を受けている。いずれも神戸のマンションに共連れで侵入して

いた。今回の事件と共通している。これをどう扱うか。

捜査幹部は裏を取らせず

神戸新聞は多くの報道機関と同じように、推定無罪を徹底するという立場から、前科・前歴について慎重に取り扱っている。ただし重大事件の背景を理解するのに欠かせないと判断すれば、例外的に報じてきた。

3年前の事件については、週刊誌が当時詳しく報じた記事がネット上に残っており、名前を検索すれば容易にたどり着けた。逮捕レクの数時間前には容疑者の名前が明らかになっていたため、その時点で各社とも把握していたとみられる。

実際、一部のメディアは即座に「独自」と銘打つなどして、3年前の事件について報じた。

だが捜査幹部は「警察としては言わない」と明確な裏を取らせなかった。社内で保管していた逮捕時の資料はすぐに見つかったが、有罪が確

定しているか否かは分からなかった。

また仮に前科があっても、事件の背景と短絡的に結び付けるわけにはいかない。今となつては「通り魔的なストーリーカー事件」とする専門家もいるが、逮捕直後は容疑者と女性の関係を警察もつかみかねていた。その状況で「再犯」と断じるような記事を出すのはためらわれた。

23、24日の週末を挟んで神戸地検の開庁を待ち、各社とともに刑事裁判の記録を閲覧。それをもって3年前の前科を報じた社も複数あった。

5年前の事件判明、記事に

記事化を決断したのは、5年前の事件が25日に取材で浮上したため



女性刺殺事件の容疑者を乗せ、捜査本部のある葦合署へ入る警察車両(8月22日夜/神戸市中央区/神戸新聞社提供)

だ。一度ならず二度までも、となれば事情は変わる。捜査が進み、過去の2事件との類似性が浮き上がってきたことも加味した。

裁判記録も閲覧し、有罪確定を確認。「おことわり」を添え、28日朝刊で「過去に2度つきまとい事件」と報じた。前科を報じたのは、全紙の中で神戸新聞が最後となった。

事件の全容が明らかでない段階で、犯人視や有罪前提の表現を避けるのは大前提だ。逮捕後に不起訴や無罪となっていないか確認すらしない「前科の早打ち競争」から距離を取り、慎重に判断したことに誤りはなかったと考えている。

一方、今回のケースでは過去の週刊誌記事がネット上に残り、新聞やテレビが報じなくても、すぐにSNSで「前科」が拡散した。結果としてストーリーカー再犯が疑われる重大事件という点を踏まえると、より積極的に切り込む姿勢も必要だった。

女性の日常が突然断ち切られた事件。動機に迫る捜査をしっかり追い、そして再発防止につながる記事を。そう肝に銘じている。

やまぎし・ようすけ▼2004年入社
社会部 姫路支社 整理部 阪神総局
などを経て、24年から報道部 25年春
から兵庫原警キャップ

群馬県伊勢崎市で41・8度

関口 健太郎（上毛新聞社伊勢崎支局長）

日本一の、いつもの風景 暑さ「先進地」対策の好機

この夏、「暑い話」をどれだけニ

ユースで見聞きしたことか。国内外で大きな出来事が起こらなければトップニュースの常連なのだから、誰もがうんざりしていたはずだ。だから群馬県伊勢崎市で国内最高記録となる41・8度を観測したと聞いても、多くの国民にとっては大したニュースではなかっただろう。また他の町で更新される記録かもしれないし、何より暑い話は聞き飽きている。この秋も恒例行事のように報じられる自民党総裁選が、ちっとも盛り上がらないのに似ている。

緊張して迎えた8月5日

昨春、生まれ故郷で現在も暮らす伊勢崎の支局に異動した。地方紙の記者らしく、誰よりも近くから地元の出来事を見つめられる仕事を気に入っている。実は国内最高気温を更新した8月5日の朝は、少々緊張しながら迎えた。前日から予想最高気温が40度を超え、この夏一番の暑さ

になると報じられていたからだ。

伊勢崎がある一日の国内最高気温を記録することは珍しくないが、群馬県内の観測点が国内の過去最高気温を更新したことはない。今夏の暑さのヤマ場となれば、記録更新の可能性もあるだろう。「暑くて暑い一日になるかも」などと考えながら玄関を出ると既に灼熱の日差しで、早くも目まいがした。

この日の県内の気温は、正午に近づくにつれて軒並み40度近くに上が



8月5日午後、群馬県伊勢崎市役所前の温度計は一時「42℃」を示していた（上毛新聞社提供）

り、午後1時すぎには桐生で国内最高タイの41・2度を観測。埼玉県鳩山町も加わったデッドヒートの様相となり、伊勢崎で41・8度を観測したのは午後2時26分のことだった。

市役所前の温度計には、記念撮影をする市民が次々と訪れた。そんな様子取材した後、せっかくなので日本一の暑さの中を散歩してみた。屋外には車以外で移動する人の姿はほとんどない。いつもの夏の、この町の風景を目にしただけだった。

同日以降、周囲には「ニユースを見た古い友人から連絡があった」というような人が多くいる。「どうせ暑いなら、『日本一暑い町』の方が気分が良い」と前向きに捉える向きが多数派なのは、直情型の上州人のメンタリティーだろうか。しかし、まずは市民の命を守ることを優先しなければならぬ行政にとっては、日本一の暑さは重い課題だ。

あやかり新名物にカレーを

市はこれまで、いち早く熱中症予防シエルターを整備し、災害時には避難所となる小中学校の体育館にエアコンを設置する事業を進めてきた。日本一の暑さは移住先や魅力度と言った観点からはマイナス要素ではないだろうが、暑さを熟知する

地域だからこそ可能な先進政策に取り組む好機と受け止めるべきだ。

もっとも民間レベルでは、暑さを地域の資源として生かそうとする動きもある。伊勢崎青年会議所は今秋、日本一暑い町の新たな名物グルメとしてカレーを売り出すイベントを企画する。人口21万人の同市には、県内最多の1万7千人超（8・1％）の外国人が暮らす。60カ国以上から人が集まるのも特徴で、南米からアジア、アフリカまで世界中のカレーを提供できる環境がある。暑さとカレーが、難題である多文化共生の追い風になるかが楽しみだ。

国がまとめた報告書「日本の気候変動2025」によれば、地球温暖化による国内の猛暑の将来予測は深刻で、全国各地で40度以上を観測する未来の到来を予想する。その意味で伊勢崎の41・8度は「暫定首位」の記録でしかない。日本一であろうとなかろうと、群馬の夏はこれから暑い。先進地としての役割に加え、あるべき暑さの報じ方についても、熱を入れて考えていきたい。

せぎぐち・けんたろう▼2002年入社
報道部で社会・経済・政治を担当した
後、東京支社報道部、経済・社会の各
デスクを経て、24年3月から現職

最前線³⁷

悪石島の群発地震

島外避難、離れぬ住民も

現場行けず電話取材

平川 順一郎

(南日本新聞社編集局長)



唯一の交通手段である村営フェリーで避難し、鹿児島港に着いた島民（7月4日/鹿児島県鹿児島市本港新町/写真・地図 南日本新聞社提供）

まず十島村の概要から紹介したい。種子島・屋久島と奄美大島の間に連なる7つの有人島と5つの無人島からなる。人口は662人（20

25年8月末）。役場は鹿児島市にある。戦後は沖縄や奄美のように米軍統治下にあった。

南北約160キロに及ぶ行政区域は日本一長く、悪石島はそのほぼ中央にある。人口は約90人。鹿児島港と奄美大島の名瀬港を往復する村営フェリーで約10時間かかる。そんな島で今年の6〜7月、群発地震が起きた。

■震度6弱、有感2300回

周辺はフィリピン海プレートやユーラシアプレート、沖縄トラフなどが相互作用する場所で、過去にも頻繁に地震が発生してきた。近くは21年12月、23年9月に群発地震が起きている。だが、今回の震度6弱（7月3日）という揺れの大きさ、有感地震2300回を超える回数は過去と比べて突出していた。

3日は深夜までに6弱のほか、4が5回、3が10回、2が29回、震度1が68回の計113回の有感地震があった。避難指示は6弱の直後に出ただけで、島にいた全員が避難場所である学校に集まり、無事を確認した後で解除された。



「小さな島で避難しろと言われても…」が本音だろう。後に鹿児島市に避難したのは、島民の自主的な判断に過ぎない。牛を育てる畜産農家、発電所を動かしている島民などは最後まで島を離れなかった。建物や道路、通信などのインフラに被害が少なかったのは幸いだった。

最終局面まで現地取材はできなかった。交通機関は村営フェリー、宿泊施設は民宿のみ。いつもは公民館を借りたりもするのだが、この状態ではままならない。そもそも記者の安全を確保できるのか。もしもの場合、島民や村に迷惑をかけないか。悩ましく、もどかしい。取材は電話がメインにならざるを得ない。

徐々に島民感情は悪くなった。ずっと揺れている島で、島民の不安や疲労が募るのは当然だ。「ただでさえ眠れずに疲れている。電話はやめてくれ」。記者が怒鳴られる事例も起きた。

島民の一部が鹿児島市に避難するタイミングで十島村から申し入れがあり、鹿児島県の報道責任社会幹事社との間で協議した。①島民の代表者のみを取材する②決められた場所から撮影する③子どもたちの顔は写さ

ない—などいくつかの約束事を決めて取材した。さまざまな課題を抱えつつも、おおむね節度ある取材を心掛け、大きな混乱はなかったと思う。

■避難先に新聞、喜ばれる

「被災・防災・減災 最前線」は取材記者が書くコーナーなのだろうが、今回は現場がないに等しい。あるのだが、行けない。

この稿を書いている途中には、隣の諏訪之瀬島で震度5弱の地震（9月17日）が起きた。諏訪之瀬島には噴火活動の続く御岳があり、悪石島の群発地震とは無関係の火山性地震という分析だ。もっと被害が大きかったら、長期化したら。台風と重なったら。記者を動かし、紙面をつくる現場責任者としての正解はなかなか見つからない。

販売部の発案で一時避難した島民の宿舎に、しばらく新聞を届けた。日頃は配達ができず、週数回の村営フェリーでまとめて運んでいる地域だ。「新聞で島の状況を知れた」と喜ばれたのはうれしかった。どんなに遠く、小さな島にも人の暮らしがあり、思いがある。それは報じなくてはならない。

ひらかわ・じゅんいちろう▼1990年入社 社会部 文化部 奄美総局長などを経て 2023年から現職

被爆80年報道 長崎新聞「つなぐ」 田中 祐作（長崎新聞社報道部社会グループデスク）

被爆証言を次世代に継承 最後の被爆地であるために

長崎を最後の被爆地に……。これは被爆者をはじめ、長崎県民の願いである。原爆被害に遭い、被爆地を拠点とする新聞社として、私たちは被爆証言を通じて原爆の惨禍と平和の尊さを発信してきた。だが、2022年2月に核保有国ロシアがウクライナに侵攻して以降、核戦争への危機感を常にかけて報道が続けている。

3社で被爆者アンケート

昨年12月に日本被団協がノーベル平和賞を受賞し、核戦争防止に被爆者の証言が重要とのメッセージが世界に発信された。被爆者の平均年齢は86歳を超え、被爆者なき時代が迫る。私たちは被爆80年報道のテーマを「つなぐ」に決め、被爆者の声を次世代につなぐ「継承」の役割を担い、被爆者同士、被爆者と読者、被爆者と世界、被爆者と次世代などを「つなぎ合わせる」ことを目指した。記者が「つなぐ存在」として能動的

に関わることも試みた。

原爆・平和報道で最も大切なのは被爆者の証言だ。今年は全国被爆者アンケートを朝日新聞社と中国新聞社と実施し、3564人から回答を得た。被爆の状況や核兵器廃絶への思い、健康状態や被爆体験の継承などについて聞き、回答者の中から母と妹を亡くした3姉妹を紹介する連載や、長崎県の離島に暮らす被爆者が置かれた状況を探る連載を展開した。核なき世界への道しるべとして、「原爆投下責任」「国家補償」「核兵器禁止条約」の3テーマで専門家に国内外の現状を聞き、被爆者の回答と受け止めについても分析した。

「長崎原爆の日」の8月9日に向けた報道では毎年、被爆者の証言を重視しており、今年も複数の被爆体験を紹介。継承に向けて記者が能動的に関わる試みとしては、小学校で平和教育のアドバイザーを務める被爆3世に、記者が被爆者をつないで授業をする様子を伝えた。



被爆者の元教師、山川剛さん(中央)に入門して学ぶ若手記者 (2024年11月/長崎新聞社提供)

長崎市が開く平和祈念式典は世界各国の駐日大使らが参列し、市長の平和宣言は世界へ発信する重要なメッセージとなる。市民や有識者を交えて平和宣言を起草する委員会は毎年5月から7月にかけて計3回開かれ、今年は国際情勢を踏まえた議論の背景や経過を丁寧に伝えるため、毎回報説記事を付けることにした。

昨年の平和祈念式典は市が不測の事態を招くとして、ウクライナ侵攻を続けるロシアに加え、中東ガザ地区を攻撃するイスラエルを招待しなかった。日本を除く先進7カ国などが反発して駐日大使の参列を取りやめ、世界の「分断」が式典に影を落

とした。これを踏まえ、今年は新聞5社で協力して駐日大使のインタビュを試み、ロシア、イスラエル、英国、イランから核兵器に対する考えを引き出して伝えた。

記者が学び、読者が追体験

被爆地の新聞社としては記者の育成も課題だ。昨年10月からは若手記者4人が被爆者の元教師に入門する年間企画に取り組んだ。被爆者運動や平和教育に尽力した山川剛さんの半生をたどり、座談会で記者が学ぶ内容。特集面で10回掲載し、記者が学びを深める過程を読者に追体験してもらおうことを意識した。

長崎が最後の被爆地であり続けるためにどういう報道を続けなければならないのか。「今日の聞き手は、明日の語り手」。今年3月、日本被団協を構成する長崎原爆被災者協議会と共催したフォーラムで被爆者が紹介した印象的な言葉だ。核兵器は被爆者だけでなく、未来の被爆者になる可能性がある私たちの問題でもある。自分事として捉えてもらうために、被爆者なき時代を見据え、模索が続く。

たなか・ゆうさく▼1996年入社
理部 佐世保支社編集部 対馬支局
報道部 写真・デジタル部を経て2024年10月から現職



1日目の交流会
(写真下)で、講師も交えて懇談する参加者の皆さん



第28回記者研修会 (8月28、29日) 全国から約100人が参加

オンライン上で拡散される誤情報などどう向き合うかは、報道機関にとって重要な課題となっている。今年はSNSにおける記者への誹謗中傷の対処法や、報道各社が7月の参議院選挙で取り組みを本格化させたファクトチェックの実践例について報告してもらった。また、記者が心得ておくべき「基本のキ」や、データ報道をハズオン形式で学ぶ講座などすぐにでも役に立つような実践的な講座も設けた。会場、オンライン合わせて約100人が参加した。

オープンデータ活用術

熊田 安伸 スロニースシニアコンテンツプロデューサー

「知りたかった」情報が充実



「知らない」と差がつく、取材の際の無駄な時間を省くツールをカタログ的に紹介する」と熊田さんが冒頭でおっしゃっていた通り、もっと早く知りたかったと思う情報が

充実していた。

消費者庁の「事故情報データバンクシステム」には、約40万件もの消費者に係る事故情報がまとまっている。この夏も話題になったリチウムイオン電池充電器が原因とみられる火災も一覽で調べることができた。このツールは、発生場所や被害者の年代、事故に関わった商品などで検索することができ、発生した事故の類似の事案を紹介する際などに使えるそうだ。

また、米航空宇宙局(NASA)が公開している「FIRMS」は、人工衛星による画像分析に基づいた火災情報をリアルタイムで見ることができる。火災以外にも戦火を検知するため戦場の分析に使われているということや、日本の報道で初めて活用した例として、読売新聞が今年2月に岩手県大船渡市で発生した山火事の被害状況をまとめた「被災情報マップ」が紹介された。

講座では他にも数々の無料で使えるツールが紹介された。サイトを実際に開いてみて、取材にどう生かせるのか、これから積極的に試してみたいと思う。

中京テレビ放送報道局 鈴木 穂香

記者「基本のキ」

奥山 俊宏 上智大学教授

澤 康臣 早稲田大学教授

「実名は最強の検証タグ」



なぜ被害者の実名を報じなければいけないのか。必要性を深掘りしていくと、報道が担うべき役割や存在意義に議論は及んだ。



澤さん(写真左)は「市民がたたく存在というのが隠れた前提になっている」と現状を指摘。報道が民主主義における議論や検証に必要な材料であるとして、「偏見とか差別と戦うのであって、情報と戦うのではない。実名は最強の検証タグである」とした。

奥山さん(同右)は、米国の銃乱射事件後、バイデン前大統領が被害者一人一人について、なぜ現場にいたのかを実名とともに読み上げた話を紹介。「人の死に関する情報を家族のみに委ねるのは正しいとは言えない」と、街や社会のコミュニケーションで死者を悼み、負傷者に同情を寄せることの公益を主張した。

中立性についても話題は広がった。記事自体に中立性が求められるわけではないという考えは、私にとって目からうろこであった。ただ、ペンを握る前の事実認定においては、中立的な視点を失ってはならないと改めて思った。

デリー東北新聞社青森支社 加藤 弘也

オンラインによる記者への誹謗中傷対処法

田中 志織

朝日新聞社ソーシャルメディアディレクター

松井 豊

筑波大学名誉教授

深刻さに衝撃 対応策強化を

SNSを通じた記者への攻撃にどう対処するかは、現在の報道機関が抱える大きな課題となっている。講義では誹謗中傷への対応や、被害者保護の在り方を考えた。



田中さん（写真右）は、X（旧ツイッター）上の誤った事実に基づく記者への批判に対し、会社として事実関係を投稿した事例を紹介。「社内でも連携して記者を守ることが重要」とし、実効性のある取り組みとして▽管理職を含めた研修▽誹謗中傷投稿の記録の取り方や報告方法のマニュアル整備などを示した。

松井さん（同左）は「調査によると、世界の女性ジャーナリストの73%がオンラインハラスメントを受けたことがある」と説明。対応の原則として「安全の確保」「孤立の予防」「心を護る」の3点を挙げ、「1人ではないという気持ちにさせることが大切」と述べた。質疑では、意図的にメディア批判をする政治家への対応も議論された。

弊社ではまだ大きなトラブルの経験がなく、問題の深刻さに衝撃を受けた。事例を参考にしながら、社内の体制や対応策の強化を進めたい。

大分合同新聞社報道部 萱嶋 悠

参院選ファクトチェック

―実践報告から報道機関の役割を考える 対象の言説 選定に悩み



（左上から時計回りで）安藤文暁、高田圭太、神戸新聞社報道部デスク、朝日新聞社ファクトチェック編集部編集長、モデレーターを務めた奥村信幸、武蔵大学教授、ファクトチェック・イニシアティブ理事

SNS上で根拠のない言説や誤情報が拡散されることが増えている。本セッションでは、参院選でファクトチェック（FC）に取り組んだ社が実践と課題を報告した。

神戸新聞は、昨年の兵庫県知事選での報道姿勢が批判されたことを機にFCに取り組んだ。参院選直前に行われた三木市長選で試みたが、対象とする言説に主語がないなど、巧妙に逃げ道が作られており、検証は困難を極めた。特定候補に集中すると、不公平と指摘される恐れもあった。参院選では兵庫選挙区全候補の選挙公報をチェック。いわゆる「黒幕説」は根拠不明がゆえに明確に打ち消すこともできなかったが、同社の安藤さんは「判断材料を一つ一つ積み重ねれば良いと考えた」と振り返った。

朝日新聞の仲村さんも難しかったこととして、対象言説の選定を挙げた。政治家の演説が話題と

なっても、自社の記者が取材しておらず、「素材」が手に入らなかったケースもあったといい、「地方紙など報道機関で連携する仕組みがあってもいいのでは」と提案した。外国人の犯罪が増えているのではとの言説については、データの取り方で印象が変わるため、記事化を見送ったという。フジテレビの高田さんは報道によって誤情報をかえって拡散しないかといった課題を挙げた。

民主主義は事実に基づいた議論によって成り立つ。その意味で、FCは重要な役割を担う。一方で、いくら報道しても人々が何かを「信じた」という気持ちは揺るがない可能性がある。「なぜ信じるのか」を丁寧に描くことも必要と感じた。

ハズオン講座 データ報道

西山 諒

産経新聞社編集部メディア編集本部デジタル企画部記者



エクセルを使ったデータ分析の基本として、「並び替え」「指定した条件に一致するデータを抽出する」「フィルター」、合計や割合、増減の比率などの「計算」の3手法を紹介。

全国の教職員数のデータを基に、小学校校長の女性比率を都道府県別に算出し、ピボットテーブルを使った集計・分析手法などを説明した。

「自分の専門領域とデータを掛け合わせると、面白いコンテンツが出せる」と語った。

（事務局）

*取材の悩みや疑問を共有

初日の記者「基本のキ」第2部では、奥山さんと澤さんが、参加者から事前に寄せられた取材の悩みなどを取り上げコメントし、意見交換した。

「議員の発言を『不適切』と報じた際に、その議員や関係者から『偏向報道だ』と批判されることがある。記者への誹謗中傷もある中でどのように対応すべきか」との質問があった。奥山さんは「私もSNS上で攻撃を受けてきた。要所要所ではきちんと反論しておく必要がある。黙っていると聞いた放題になりかねない。議論を始めると泥沼になる。一言言ってその後は一切取り合わない方がよい。その対応を社と個人どちらで行うかはしっかりと打ち合わせるべきだ」と語った。（事務局）

【プログラム】8月28日（木）▼概要説明▼オープンデータ活用術・熊田安伸 スローニュース シニアコンテンツプロデューサー▼記者「基本のキ」第1部・奥山俊宏 上智大学教授、澤康臣 早稲田大学教授▼記者「基本のキ」第2部 デイスクッション▼名刺交換・交流会 8月29日（金）▼ハンズオン講座 きょうからできるデータ報道・西山諒 産経新聞社編集局メディア編集本部デジタル企画部記者▼オンラインによる記者への誹謗中傷 対処法を考える・田中志織 朝日新聞社ソーシャルメディアディレクター、松井豊 筑波大学名誉教授▼参院選ファクトチェック実践報告から報道機関の役割を考える・安藤文暁 神戸新聞社報道部デスク、高田圭太 フジテレビ報道局政治部長、仲村和代 朝日新聞社ファクトチェック編集部編集長、モデレーター・奥村信幸 武蔵大学教授、ファクトチェック・イニシアティブ理事▼参加者…28日〓会場68人、オンライン38人、29日〓会場58人、オンライン30人

サイバー記者ゼミ⑤

第1部「サイバーをどう記事に? 若手記者の現場から」、第2部「模擬記者会見で学ぶ サイバー攻撃の取材術」

9・17／講師…第1部 岩沢明信 日本経済新聞社ビジネス報道ユニット記者、福田陽平 NHK報道局科学文化部記者、第2部 須藤龍也 日本経済新聞社編集委員、寺岡篤志 日本経済新聞社データ・調査報道センター記者、成田直翔 トレンドマイクロ シニアスペシャリスト／出席…会場46人、ウェブ43人

■次につながる知見や人脈も

東京都内で開かれた5回目のサイバー記者ゼミに、初めて会場で参加した。ゼミ終了後の懇親会も含め、さまざまな知見の獲得や人脈の構築につながり、総じて有意義だった。開催は平日の夕方、多少の疲労感を覚えながらの参加となったが、時間がたつのは意外と早かった。

予定時間を超過して1時間50分にわたったゼミは、前後半に分けられ、前半は日本経済新聞およびNHKの記者が、ロシア系ランサムウェア「コンティ」や社労士業務の支援システム「社労夢」などの事例を基に、サイバー取材の現場を説明。他社の記者の前で話せる内容には限界があっただろうが、取材の端緒や分析、裏取りや報道の仕方などでの勘所を押さえる上で参考になった。

後半は、日経のベテラン記者およびトレンドマイクロの専門家が、簡単な寸劇を交えながら、サイバー攻撃を受けた企業を想定した模擬記者会見を実施。個人的には記者会見自体よりも、攻撃から報道発表までの社内でのドタバタといった、記者会見の裏側でのやり取りの方が興味深かった。

最後に、記者ゼミと銘打ちつつ、実際にはサイ

バー関連の企業関係者の姿も多く見られ、懇親会で話すことができた。ここでの成果も、次につながれば良いと思っている。

産経新聞社科学報道室長 小野 晋史

土曜記者ゼミ

Ⅰ編③

データで魅せる! データジャーナリズムの極意

9・13／講師…にゃんこそば データ可視化職人／出席…会場19人、ウェブ43人

■「データを地理的に可視化せよ」

にゃんこそばさんは、さまざまなオープンデータを地図やグラフ、チャートで可視化して、SNSなどで発信している。「データをただのランキング表で終わらせずに地図にプロットすることで、空間的なパターンや塊から本質的な問題に迫ることができると話し、「地理的に可視化せよ」といったデータ可視化の鉄則を伝えた。

調査報道②

スポーツ団体の情報公開請求とパワハラ問題の報じ方

9・20／講師…小泉耕平 フリージャーナリスト／出席…会場6人、ウェブ14人

■「ロジックによる武装が必要」

日本パラバドミントン連盟を巡る不透明な金の出入りや理事長によるパワハラ問題を4月から8回にわたりスローニュースで追及した。取材で得た教訓として日本パラスポーツ協会倫理規定などを読み込むことで、「当局のパワハラ認定がなくとも常識的に考えておかしいことは書いて世に問うべき。そのためにはロジックによる武装が必要」と話した。（事務局）

私^が会^{った}あ^の人

「金嬉老事件」の金嬉老さん

「祖国」と「日本」複雑な胸中

佐藤 大介（共同通信社）

待ち合わせ場所として指定された韓国南部・釜山市のホテルで、ロビーに座っていると、1人の老人が現れた。

茶色のコートにマフラーをまとい、ゆっくりと歩く。その姿は幾春秋を経た古老だが、鋭い目つきが独特の雰囲気放っている。私に気付くと、警戒心と懐かしさの交ざったような視線を向けながら近づき、右手を差し出した。その男性は金嬉老^{キムヒョロ}さん。日本では「きんきろう」との読み方が耳になじんでいる人も少なくないだろう。1968年に静岡県内で暴力団員2人を射殺、人質を取って旅館に立てこもった「金嬉老事件」の犯人だ。

私が金さんと会ったのはソウル特派員だった2010年2月のことだ。その月に韓国政府が公開した外交文書には、金さんが熊本勤務所に服役中、「暴行や差別的な取り扱いを受けた」として日本政

府に抗議するよう韓国外相宛ての陳情書を送っていたことが記されていた。その事実関係と現在の思いを聞くために、釜山へ出向いた。

差別告発の闘士から暗転

金さんは旅館に籠城中、報道陣を旅館内に呼び寄せて在日韓国・朝鮮人への差別を糾弾し、社会的に大きな関心を集めた。裁判で無期懲役が確定し、逮捕から31年半後の1999年9月に仮釈放され、韓国へ渡って釜山に居を構えた。韓国では「日本で民族差別を告発し闘った人物」として英雄視され、各地で講演などを行い、移動する際は警察当局の警護が付く待遇だった。

だが、2000年9月に内縁関係にある女性の夫を殺害しようとして竹やりだけがをさせ、部屋に放火したとして殺人未遂容疑などで地元警察に逮捕され、実刑判決を受けたことで、金さんへの視線は一転。メディアへの露出はほとんどなくなり、

金嬉老さん（2010年2月20日／韓国・釜山／筆者撮影）



釜山でひっそりと暮らしていた。

事件当時は39歳だった金さんは、取材した時は81歳になり、頭髮はなくなっていた。40年以上の時の流れを感じさせたが、当時のことを尋ねると「暴行は日常茶飯事だった」と、はっきりとした口調で答えた。「看守に指示された受刑者が暴行してきた」「日本では差別に苦しめられた」。日本語で答えているせいか、その言葉にはだんだん熱を帯びてくる。眼には怒りがこもっていた。

だが、ふと表情を緩めて「もう過去のことだ」とも話した。「韓国での生活は、言葉の面など苦労は多い。日本にいたのなら、自分を生かせたのではと思う時もある」。そう口にする表情には、寂寥感^{せいきりやう}も漂っていた。帰り際に取材のお礼と、ポケットマ

ネーでいくばくかの現金を手渡すと、笑顔で「ありがとう」と礼を述べた。

空見上げ 日本へ思い募る

それから金さんから何度も電話があった。酔っていたのか、差別された体験を、音が割れるほどの大きな声で訴えていた。金さんの訃報に触れたのは、それから1ヵ月ほど後のことだった。「また話をしましょう」という約束は果たせないままだった。

金さんは韓国を「祖国」と言い切りながらも、生まれ育った日本には「思いを捨てたことはない」と複雑な胸中をのぞかせていた。「空を見上げ、日本の方に飛んでいく飛行機を見ると、近くても行くことができない日本への思いが募る」。いまでもその言葉に、韓国の歴史を重ね合わせている。

（さとう・だいすけ 2002年入社
ソウル支局 ニューデリー支局などを
経て編集委員兼論説委員）

次号は佐藤さんの地元紙で、共同通信社の加盟社会合を通じて親交のある中村公美さん（北海道新聞社）にバトンが渡ります。

拉致事件を巡り論争 北朝鮮幹部の消息は書けず



つかもと そういち
塚本 壮一

1989年NHK入局 山口放送局（下関支局）報道局国際部記者 中国総局 ソウル支局長 ニュース「おはよう日本」編集 解説委員などを経て 2019年から桜美林大学リベラルアーツ学群教授 2004年から24年まで東アジア専門誌・月刊『東亜』の「朝鮮半島の動向」執筆

2002年9月17日、日朝首脳会談。平壤・高麗ホテルで待機していた私たちNHKの3人を含む日本人記者団に会談の結果を伝える外務省幹部は沈鬱な表情で、声も小さかった。日本人拉致被害者のうち、横田めぐみさんが死亡したとする北朝鮮側の通告内容を明らかにしたところ、外務省キャップが会見場を飛び出して中継ポイントに走った。金正日総書記が「特殊機関の一部が妄動主義、英雄主義に走った」と拉致の事実を認め、謝罪したと言及したところ、今度は私が飛び出した。階段を駆け降りる私を見てホテルの従業員らが笑うのが目に入り、腹が立ったのを覚えている。未明になってホテルの自室に戻ると、窓の外に漆黒の闇が広がっていた。「この暗闇の中で拉致された人たちが息を潜めているのか」と心の底から震撼した。

◆「こっちは命がかかっている」

北朝鮮取材では、対文協（朝鮮対外文化連絡協会）や外務省の職員らが日本メディアの各社に配置され、滞在期間中、ずっと顔を合わせることになる。数回にわたる訪朝取材では、そうした人たちとさまざまな会話を重ねた。

論争に発展することもあった。2006年7月の訪朝取材では、横田めぐみさんが火葬されたと北朝鮮が主張する火葬場に案内された翌日、「なぜ日本人は横田めぐみの死亡を信じないのか」と議論を仕掛けてきた人がいた。北朝鮮がめぐみさんは死亡したと日本のメディア各社に印象づけようとしているのに思うままにならないことにいら立ったのだから。私が「ご両親が生きていると言っておられるのに、亡くなったなど

と言えるのか」と反論すると、「メディアの責任だ」と話をそらした。思わず、「あなたは目が曇っている。目をしっかり開けてください」と言ったのだった。

拉致問題で日朝関係が悪化する中、北朝鮮で日本担当者が厳しい立場に置かれていることをうかがい知ることもあった。北京で会食をした北朝鮮外務省幹部は、その後平壤で会ったときには視線も合わせなかった。比較的羽を伸ばせる国外と異なり、周囲の目があるからだろう。日本を担当することの辛さを吐露した人もいる。日本の報道への不満を口にするので、私がネットで「朝鮮労働党の犬」などと嘲笑されていることに触れながらそれなりに懸命に仕事をしていると話したら、「これまでに日本のメディアの世話をしたあげくひどい放送を出され、大変な批判

にさらされてきた。こっちは文字通り命がかかっている」と言い返してきたのだった。

◆目ぞらし煙吐いて一気に

北朝鮮側と論争ばかりしていたわけではもちろんない。中継を前にコメントの下読みをしていたところ、先方のひとりが少し離れたところで聞き耳を立てていたことがある。私のそばに近寄ることは遠慮しつつも、リポートの内容を知りたがっている気配だ。彼らは上層部への報告の義務がある。どのみち私のコメントは放送で流れるから隠す必要もない。あえて大きな声で下読みを続けたのだった。そして、中継が終わると彼は笑顔で近づき、内容に不満を述べた。「聞こえませんでしたよ」と言いに来たのである。

重要な情報を教えてくれた人もい



金日成広場のひな壇に立つ金正恩氏（中央）と崔竜海氏（左）
（2012年4月/北朝鮮・平壤/筆者撮影）

た。現在、最高人民会議常任委員長を務める崔竜海氏が1998年に金日成社会主義青年同盟第1書記を解任されたあと動静が伝えられず、死亡説も取り沙汰されていた時期のことだ。取材の空き時間に建物の外で、ある当局者と二人きりになった瞬間があった。雑談をしていたのだが、話が途切れたところで思い切って「崔竜海さんはどうなったんですか」と尋ねてみた。相手はしばらく私を凝視したあと、「塚本さんは共和国のことをよく勉強していますね」とつぶやいて私から目をそらし、手にしていたタバコを口に運び、ゆっく

り吸って煙を吐き出すと一気に言った。「崔竜海さんは自動車修理工場の支配人をしています。抗日バルチザンの息子さんであるのは知っていますよね。だから助かったんです。地方にも行かされずにすみました。平壤にいます。時がたてばまた要職に戻りますよ」。しかし、これを書いた勇気はなかった。確認の手立てがなかったことと、なにより、相手を危険にさらすわけにはいかなかったからである。数年後、崔竜海氏は復権した。

◆金正恩氏のサプライズ演説

そして、金正恩時代。同氏が朝鮮労働党第1書記に就任した2012年4月、北朝鮮は日本や欧米など多くの外国メディアを受け入れ、最高指導者の本格デビューを華々しく打ち出し、権威を高めようとしていた。そのために私たち外国メディアにミサイル発射場や管制センターの取材を認めるという異例の対応を取ったのである。発射台に据え付けられたミサイルは部品を隠すための覆いも施されておらず、発射成功に自信を見せていた。ところが、発射は失敗に終わってしまう。しかし、その半日後に平壤中心部の万寿台の丘で行われた金正日総書記の銅像の除幕式

に姿を現した金正恩氏は幹部らに笑みを見せ、大勢の人々に手を振ってみせた。当然といえば当然だが、発射失敗に終わったショックなど、おくびにも出さない。遠目にその様子を見ながら、指導者としての堂々たる振る舞いは天性のものと感じざるを得ず、若さと未熟さゆえに権力維持に失敗するとは限らないと悟った。

翌々日に行われた軍事パレードでは、金正恩氏が20分あまりにわたって演説するというサプライズを演出した。父親の金正日総書記が大衆の前で肉声を発したのは、「英雄の朝鮮人民軍将兵らに栄光あれ」と叫んだ1回だけである。式典の司会者が金正恩氏が演説を行うと告げると、金日成広場を埋め尽くす人びとの中には、意外な展開に隣同士で顔を見合わせる人もいた。金正恩氏の演説はやや早口で、緊張しているのではないかと感じたが、その低く、くぐもった肉声は金日成主席の声を彷彿とさせる。はたして、のちに行った市民インタビューでは「そっくりの声で感動した」などと称賛する答えが返ってきた。金正日総書記の死去から数カ月も経たないうちに北朝鮮指導部は新しいリーダーのカリスマ性を高めるべく着々と手を打ち、そ

れがどうも効果をもたらしているらしいことを実感したのであった。

◆多国間イベント予想外の訪中

現在、北朝鮮は核保有国を自認し、ミサイルの発射失敗も減った。先月には北京の天安門広場で行われた中国の「抗日戦争勝利80年記念式典」で金正恩総書記が習近平国家主席やロシアのプーチン大統領とともに、各国指導者を従えるようにして歩く映像も公開された。中朝首脳会談では、中国側が過去5回の会談では必ず言及した「非核化」に触れなかったことが注目された。調べてみたところ、中国側が使わなかった言葉は、ほかに「推進」「実現」「解決」「対話」「共同努力」などがある。中国が北朝鮮の核問題解決に向けた意欲を失ったと断定することはできないが、少なくとも北朝鮮に気を遣っていることは確かだろう。

今回の金正恩総書記の訪中は、マルチ（多国間）の場には出ないという予測に反するものだった。娘を同行させたことも意外だった。北朝鮮のことを何もわかっていないと自覚させられる。外交的には余裕を持ち始めたいらしい北朝鮮の行方はどうなるのか、さらにつぶさに観察しなければならぬと覚悟している。

マイBOOK マイPR

『イスラエル人』の世界観

大治 朋子（毎日新聞社専門編集委員）

思考のメカニズムを追う

「イスラエルのユダヤ人は、なぜパレスチナ市民の苦境に無頓着でいられるのか」彼らはどのような世界観の中に生きているのか。エルサレム特派員や研究者、ボランティアとして現地で6年半暮らし、「解けない謎」と格闘しながらその思考のメカニズムを追った記録です。幼いころから読み続ける旧約聖書、迫害の歴史を日常的に想起させる社会システム、脅威意識を植え付ける政治。「謎」を解く手がかりと出会えるかもしれません。



毎日新聞出版 1,980円

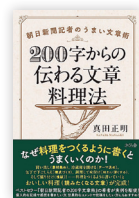
『200字からの伝わる文章料理法 朝日新聞記者のうまい文章術』

真田 正明（朝日新聞社出身）

あなたの「おまかせ」を

文章術も3冊目。ネタにこまってる料理になぞらえてみたら、意外にうまくはまったような。買い出し、下ごしらえ、火入れ、味付け、盛り付け。話題は新鮮さが一番——ではあ

るけど、冷凍庫の奥で眠っている食材も、調理の仕方によって生きてきます。和食の「おまかせ」は、いまや「OMAKASE」として世界で通じるそう。「すきやばし次郎」のおまかせが、見事な起承転結になっているのを見つけたのは、ちょっと自慢。食べたことはいのすが。



さくら舎 1,760円

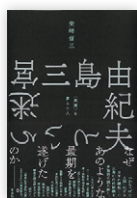
『三島由紀夫という迷宮 〈英雄〉を夢見た人』

柴崎 信三（日本経済新聞社出身）

事件の輪郭と核心を解く

「楯の会」の若者を伴って三島由紀夫が乱入、割腹自決を遂げたあの市ヶ谷の陸上自衛隊総監部の現場に23歳の駆け出し記者がとび込み、その足で近くに住む評論家の江藤淳から談話をとった。それから半世紀を優に超す時間を隔てて、かつて愛読した三島の主だった作品を懐かしみつつ読み返した。

あたかも「証拠の多すぎるミステリー」のようなあの事件の輪郭と核心が、歳月という暗闇からゆつくりと立ち上がってきた。



草思社 2,420円



自民党総裁選のニースをみていて、政治部の若手として、取材先の国会議員宅へ朝回りをしていた頃を思い出した。

渋滞する首都高速4号線から杉並や中野の街並みが見える。ものすごい数の住宅やマンションだ。

「ここに住んでいるたくさんの人々の税金を、取材している国会議員たちが決めているんだ。でも、彼らにそんな権利があるのは不思議だな」

衆院選や参院選で当選するのは大変な労苦を伴うと当時も分かってはいたが、「紙の札に自分の名前を書かせる競争に勝っただけではないか」という思いがわいた。それは今も頭の片隅にある。

入れ札（入れ札ではなく投票の意）でライバル候補に勝てば国会議員になる。勝ち続ければ有力議員として幅を利かせる。能力を磨く議員もいるが、そうではなく実力以上の評価を得てしまう議員も現れる。

国会では投票で法律や予算が決

名を書かせる力と能力

まり、多くの政党で、党首は選挙で決まる。その党首が国会の指名選挙で首相になったりもする。

専制国家よりも自由と民主主義を貴ぶ国のほうが国民は幸せも生存も追求しやすい。だから、紙に自分の名前を書かせるのに長けた人々が政治のかじ取りをする議会制民主主義は間違いではない。

そもそも政治家の資質を客観的に判定できる方策もない。記者の端くれとして、批判的に書くこともあるが、選挙で選ばれた国民の代表たる国会議員を尊重する思いもきちんと持っているつもりだ。

ただし、国会議員には「苦労している人が多いとしても」自分分は紙に人より多く名前を書かせたにすぎないという謙虚な気持ちを持って政治に励んでほしいと思う。

有権者にへりくだってほしいわけではない。政治を担う能力、資格が自分にあるのかと常に問い、研鑽を重ねてほしいのである。

産経新聞社上席執行役員論説委員長

榊原 智

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 十月お献立 (10/31まで)

先付前菜：秋刀魚すだち挟み、揚げなす田楽、鴨ロースしそ酢のせなど 馬上杯：くるみ金山寺 碗盛り：松茸土瓶蒸し 造り：いさき焼き霜、博多文甲いか 焼き物：秋鮭幽庵焼き 煮物：舞茸みそ漬、飯蒸しなど 食事：せいろそばデザート：りんご赤ワイン漬、柚子シャーベット (5,500円) (板長：薫田勝) ※仕入れの都合で内容が変わることがあります。

洋食 季節のおすすめコース (10/31まで)

イタヤ貝とトマトのサラダ 柑橘のヴィネグレット、人参のクリームスープ、牛フィレ肉のグリル キノコ入りフォンドボーソース、マロンチーズケーキ、コーヒーまたは紅茶、パンとバター (4,400円)。ランチ、ディナーともに9階レストランでもご提供します。 (シェフ：佐藤和治)

<法人代表変更>

- ・ビーエスフジ 小川晋一 代表取締役社長 (旧 亀山千広氏)
- ・CNN Montgomery, Hanako 東京支局代表、特派員 (旧 Stewart, Marc氏)

HP情報 <https://www.jnpc.or.jp/>

音声アーカイブ 会員の音声記録

- パラ競泳 成田真由美さん公開しています
先月死去したパラリンピック競泳女子金メダリストの成田真由美さんは2000年11月10日、シドニーパラリンピックから帰国して9日後に当クラブで会見しています。シドニー大会では7種目に出場し、6個の金メダルと1個の銀メダルを獲得しました。当時の会見音声を公開しています。

今後の行事予定 (10/2現在)

17金	13:00～14:30 10階ホール 著者と語る『タブーを破った外交官』 田中均 日本総合研究所国際戦略研究所特別顧問
	17:30～19:00 10階ホール 試写会「はだしのゲンはまだ怒っている」
20月	15:00～16:30 10階ホール 「トランプ2.0」⑬ 赤坂清隆 元国連広報担当事務次長
21火	14:00～15:30 9階会見場 「人口減少時代を生きる」② 梅屋真一郎 野村総合研究所 未来創発センターフェロー
23木	14:30～16:00 9階会見場 「極端な天候 どうして、どうなる」 渡部雅浩 東京大学教授
30金	14:00～15:30 9階会見場 「新冷戦下の世界とアジア」 白石隆 熊本県立大学特別名誉教授

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン (9階) ☎3503-2723 ●会員事務 ☎3503-2727
- 洋食レストラン (10階) ☎3503-2766 ●経 理 ☎3503-2728
- 貸室予約、宴会打ち合わせ ☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み ☎3503-2722
- 受 付 ☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：121社 ●基本会員：699人 ●個人会員：973人
- 法人・個人賛助会員：54社・114人 ●特別賛助会員：97人
- 名誉・功労会員：12人 ●学生会員：76人 計175社・1,971人

新しい個人D会員

長 典俊



1984年朝日新聞社入社。東京・名古屋本社社会部、ゼネラルマネージャー兼東京本社編集局長、執行役員名古屋本社代表。2019年から名古屋テレビ放送取締役、代表取締役専務、代表取締役副社長を経て、現在、顧問。

新聞・放送での約40年にわたるメディア人生は一区切りですが、引き続き、報道とメディアの在り方を考え続けたいと思います。

いま新たに個人D会員になると、1年間、会費が半額になる入会キャンペーンを実施しています。ぜひこの機会に入会をご検討ください。詳細は事務局・杉本 (03-3503-2727) までお問い合わせください。

<移転のお知らせ>

京都新聞社
<経営企画局>
〒604-0857 京都市中京区烏丸通二条上ル蒔絵屋町260 京都新聞トラストビル
<論説委員室、編集局>
〒604-8577 京都市中京区烏丸通六角下ル七観音町634 ONEST京都烏丸スクエア

会議報告

●第466回会報委員会 (9.3 大会議室)

10月号の編集について協議した。

出席 榊原委員長、森、高橋、成田、佐藤、飯山、辻の各委員。

●第564回企画委員会

(9.10 10階ホール&オンライン)

自民党総裁選の立候補者討論会の開催方式を議論した後、今後のゲスト候補について意見交換した。「2026年経済見通し」の担当委員も委嘱した。

出席 菅野委員長、行方、佐藤、橋本、猪熊、大内、奥村、高橋、辻本、乾、森田、吉村、内田、杉田、小林、白石、早川、森、山口、宮内、出川、山下、岩田、小栗、藤川、滝の各委員。

●第577回会員資格委員会 (9.11 小会議室)

10月1日付入退会を審議、理事会に答申した。また、入会時に必要な推薦署名の在り方について協議した。退任する山本明彦委員 (毎日新聞社) があいさつした。

出席 福島委員長、佐々木、山本、松永、池澤、杉田、中村、中本、武井の各委員。

会報委員会

委員長＝榊原 智
委員＝飯山 雅史 勝田 洋人 鴨下ひろみ
佐藤 圭一 高橋 清子 田中 成之
辻 篤子 成田 浩二 堀口由多可
森 一徳

(事務局：西村志織 本庄五月)

☎03-3503-2729 FAX 03-3503-7271

撮影：恵原 弘太郎 (朝日新聞社映像報道部)



早朝の大阪・関西万博会場の東ゲート前では、開場を待つ人たちが強い日差しを避けようと日傘を広げ、花畑のように見えた＝8月17日、大阪市此花区、朝日新聞社ヘリから

花開かせるもの

誰とも分らない人々が作り上げた日傘の文様に、「民藝」が浮かんだ。今年は、宗教哲学者の柳宗悦らが、名もなき職人が作った日用品に美を見いだし、「民衆的工藝」を「民藝」と名付け運動を始めて100年を迎える。地球の悲鳴のような猛暑で満開となった日傘も、暮らしに応じた「実用性」という点で現代の民藝のように見えてくる。

1970年の万博では、関西財界人有志と柳が初代館長の日本民藝館(東京・駒場)がパビリオンを出展。跡地の万博記念公園(大阪・千里)にはパビリオンを引き継いだ大阪日本民芸館が建つ。2025年の万博を記念して開催中なのが「棟方志功と福光の風景」だ。柳を師と仰いだ棟方は戦中戦後、富山県福光町(現南砺市)に疎開。そこで制作した絵画や版画を展示している。蓮如の布教以来、浄土真宗の思想が根付く福光での暮らしや人々との出会いで、棟方は作品に宗教的な深みを得たという。

「土徳」。南砺を訪れた柳が造語したこの言葉にひかれ、向かった。「土徳とは何ですか」というベタな問いに、となみ民藝協会会長で真宗大谷派大福寺住職の太田浩史さんは「育む力」と答えた後、続けた。「それを説明すると限定的になってしまう。気になって考えたと自分の中で成長して、花開く」。宿にあった南砺市民藝調査報告書に、この地の人が考える「南砺の土徳」が記されていた。「根ざして生きることで生まれる在り方」「弱い人に、与え尽くすほど与えるという考え」「空気、エートス(生活態度)」「土とともに」……。太田さんは「土徳は、日本、世界各地どこでもある。国際語になり得る素質がある」とも語った。大阪・関西万博の跡地利用。「レガシー」より、その地をその地たらしめている、「土徳」で考えてみては？

(毎日新聞社出身 山田 道子)